

名古屋帯寸法についての一考察 (第2報)

——お太鼓柄帯の寸法の定め方——

高月智志子*・日野キヨミ**・熱田道子*

(昭和56年9月30日受理)

A Study of the Measurement of Nagoya-Obi (Part 11)

—How to Fix the Relation between the Two Patterns—

Cishiko TAKATSUKI, Kiyomi HINO and Michiko ATSUTA

(Received September 30, 1981)

緒 言

和服の着装で最も重要な役割を果たすものは帯である。特に女性の場合は、帯姿に魅力を感じるものである。帯の種類、結び方については多種多様であるが、一般的に通常用いられている帯は、名古屋帯であり、その結び方は老若を問わずお太鼓結びが多い。

名古屋帯の柄には、全通、六通といわれる連続模様のもと、お太鼓柄といわれる飛び模様とがあり、前者の場合は帯結びに際して模様が出ないということはないが後者の場合は、前中心とお太鼓部分にのみ模様が付けられている為、お太鼓結びにした場合、ポイントになる模様が隠れることがある。すなわち希望通りの位置に模様がでていない場合である。その理由としてはいろいろであるが、帯丈寸法が適切でないことも理由の一つである。しかしその寸法設定方法については、適切な文献は見当たらない。そこで今回は、帯結びの際お太鼓部分の模様が希望通りの位置に出るようにするためには、どのような因子が影響を及ぼしているのか着装実験を行ない分析し、着装上より効果ある締めやすい帯を製作する為には、どのように行なえば良いのかを検討したので報告する。

実験方法

1. 被験者

本学服飾美術学科3年被服専攻の学生6名、および着物コンサルタント、着装士1級を所持する年配者1名を被験者とし、学生6名の内体格の大きい者3名をAグループ、体格の小さい者3名をBグループとして、体格差

がお太鼓結びに及ぼす影響について検討の対象とした。着物コンサルタントについては、被験者Cとして着装の不慣れな者との比較対象とした。被験者の体格は、表1の通りである。

2. 実験用帯地

市販の袋名古屋帯を用い、その諸元は、表2の通りである。実験用帯の寸法については、表3の通りで、胴囲り寸法は各被験者の体格に合わせて、帯を締められる最適状態で採寸した寸法を用い、他の部位での寸法は、松井等^{1,2)}の方法によるもので、これを基本寸法として定める。尚、図1の通りB、E、C、D点には糸印をほどこし計測部位とする。

帯枕の諸元については、幅22.5cm、高さ8cm、厚み3.6cmのものを使用した。

3. 着装条件

胴囲り寸法の採寸時と同じ状態でお太鼓結びをする。お太鼓の大きさは27cm、垂れ8cm、手の始末は、お太鼓幅の両端に2cm出るように結ぶことを条件とし、お太鼓山を形作る帯枕の当て方は下記の2種類、手と垂れの結び方は4種類とする。

イ. 帯枕の当て方

- 両手を後ろに廻して帯の裏側に帯枕を当て背にのせ、お太鼓山を形作る方法。
- 模様の位置を見定めやすいように、脇で帯枕を当てる方法。

ロ. 手と垂れの結び方

- ① 手を左肩に掛け胴囲りを2回廻し、B点とC点の糸印を合わせて背中心で手が下に垂れが上になるように結ぶ。図2—①
- ② ①と同様に結び、その結び目がゆるまぬように

* 第1被服構成研究室

** 第3被服構成研究室

表1 被験者の体格

(単位cm)

被 験 者		A グ ル ー プ			B グ ル ー プ			C
		1	2	3	1	2	3	
身 長		162.0	163.5	163.5	150.4	151.0	150.8	151.0
手 極	左	86.0	86.0	86.0	76.5	76.0	75.0	77.0
	右	87.5	87.0	86.5	77.5	76.5	75.5	79.5
胸 囲		86.0	81.0	83.0	80.0	84.0	84.0	86.0
胴 囲		66.0	64.0	65.0	63.0	66.0	65.0	78.0
腰 囲		96.0	94.0	96.0	86.0	90.0	88.0	97.0
体 重		56.0	57.0	58.0	44.0	50.0	48.0	52.0
ローレル示数		1.31	1.30	1.32	1.29	1.45	1.39	1.51

表2 実験用帯地の諸元

試 料	組 成		組織	厚さ (mm)	糸密度(本/cm)		平面重 (g/cm ²)	番手(tex)	
	たて	よこ			たて	よこ		たて	よこ
袋名古屋帯	ベンリエート	レーヨン	朱子織	0.66	155	18	0.04	11	36

表3 実験用帯の各部の寸法

(単位cm)

名 称	基本寸法	寸法の設定方法
お太鼓丈	105	帯幅×3.5
胴 囲 り 丈	各被験者の寸法	胴囲り×2
手 の 長 さ	60	帯幅×2
お太鼓山の寸法	30	胴囲りとお太鼓の境 い目より帯幅寸法
帯 幅	お太鼓	30
	胴囲り	16

手と垂れの向きを反対方向に変える。図2-②
 ③ 手と垂れを結ばず背中心で交差させ、胴囲りがゆるまないように紐をかけて押える。図2-③
 ④ 胴囲りを2回廻し、B点とC点の糸印を合わせて背中心で止め具を用いて押える。図2-④
 尚、帯結びについては、着物コンサルタント、着装士1級所持者の指導の下に昭和54年6月に行なったものである。

4. 計則項目

1. 帯枕の当て方aの場合の手と垂れの結び方4種についてB-Eの長さの変化。

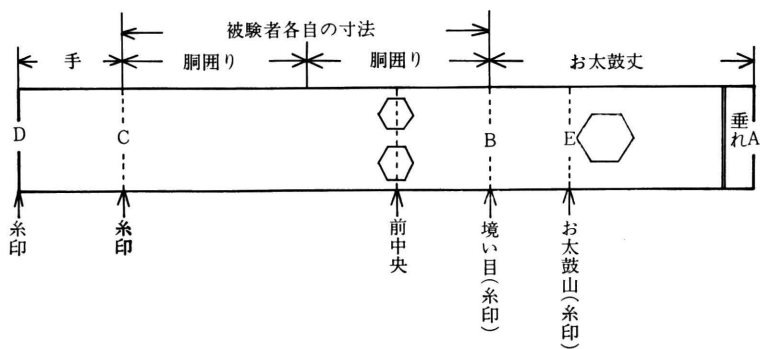


図1 実験用帯

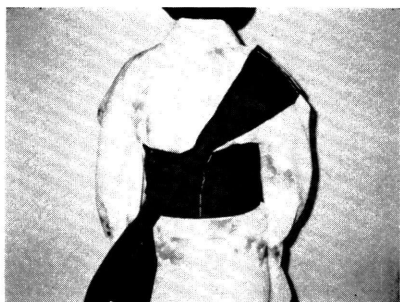


図2-①

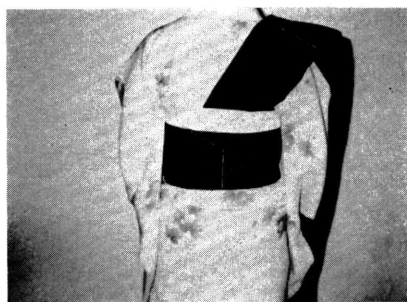


図2-③



図2-②

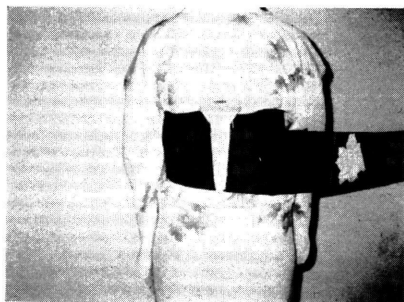


図2-④

2. 帯枕の当て方bの場合の手と垂れの結び方4種についてB-Eの長さの変化。
3. 手と垂れの結び方4種についてC-Dの長さの変化。

結果及び考察

お太鼓山を形作るために用いる帯枕の当て方が同じ方法であっても、手と垂れの結び方の違いにより、胴囲り

とお太鼓の境目、すなわちB点からお太鼓山E点までの寸法は異なったものとなる。また同じ結び方であっても帯枕の当て方の違いによってもその寸法は異なる。結果は、表4の通りである。計測値は、同一条件で実験を3回行ない、その平均値を示したものである。

1. 帯枕の当て方aの場合

- ① 最も一般的に行なわれている結び方であるが、B-E間の寸法は、基本寸法30cmと比較した場合、

表4 条件の違いによるB-Eの計測値

		(単位cm)		
帯枕の当て方	結び方の種類	A	B	C
	a	1	36.0	35.0
2		37.0	37.0	35.0
3		39.0	39.0	43.5
4		40.0	38.0	43.0
b	1	40.0	37.0	37.0
	2	41.0	37.0	42.5
	3	43.0	39.0	45.5
	4	42.0	38.0	46.0

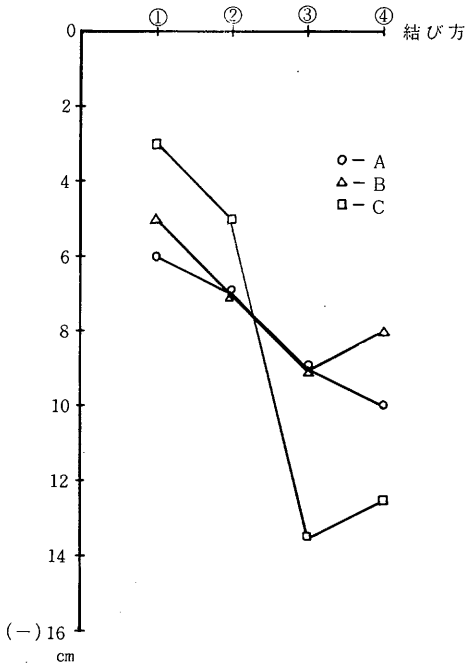


図3 帯枕の当て方aの場合のお太鼓山の変化

図3の通りで、0は基本寸法を示し、(-)は不足寸法を示すものである。被験者グループA・B・C共に、その寸法は不足する。不足量の大きさは、Aグループの6cm、次いでBグループの5cm、Cでは3cmの不足であった。

② 結び方は、①と同様であるが、結び目がゆるまないように手と垂れの向きを反対方向に引張り、結び目を落ち付かせる方法であるが、①と同様各被験者ともに基本寸法より不足し、A・Bグループ7cm、

Cでは5cmの不足であった。①と比較した場合、Aグループで1cm、B・Cでは各2cmの不足量が増していたが、これは、手と垂れの向きを変えることにより生じた不足量増と考えられる。

③ 帯地が傷まないように、また背面がかさばらないように紐で押える方法であるが、B-E間の寸法は、①②の2方法に比べ、寸法は更に増大し、基本寸法との比較ではA・Bグループではいずれも不足量9cm、Cでは13.5cmであった。これは、普通手結びの場合結びやすくするため、B点、C点で帯幅を更に狭くしわづげして結ぶため、帯枕を当てるに当り、お太鼓側の帯幅を平らになるように開く操作が容易であるが、この場合は、B点、C点では帯幅は胴回り幅寸法そのままの状態で交差されており、お太鼓幅を平らに開く操作が前者より開きにくいための寸法増と考えられる。Cにおいては②との差が大であるが、後ろ手での操作が①②の方法に比べ困難であるため、身体の柔軟度の差によるものと考えられる。

④ ③と同様、手と垂れを交差させ、止め具を用いて胴回りがゆるまないように止めるのであるが、③と同様にお太鼓幅が開きがたく、Aグループでは10cm、Bグループでは8cm、Cでは13cm基本寸法より増大する結果となった。しかし、③との比較では同じ傾向を示している。

2. 帯枕の当て方bの場合

結び方の違いによるB-E間の寸法は、表4の通りで帯枕の当て方aの場合よりB-E間の寸法は更に増大している。aの場合に比べお太鼓丈を後ろから脇に廻して帯枕を当てるため、お太鼓幅を平らに開く操作に必要な丈の余裕だけでなく、脇に寄せるための丈の余裕が加算されるものと考えられる。

① 基本寸法B-E間に比べ図4の通りで、0は基本寸法を示し、(-)は不足寸法を示すものである。

Aグループでは10cm、B・Cでは7cmの不足であり、aの①に比べAグループでは4cm、Bでは2cm、Cでは4cm増の不足量であった。

② aの②に比べAグループでは4cm、Cでは7.5cm増の不足量であったが、Bでは変化なし、①との比較ではAグループで1cm、Cでは5.5cm増の不足量であった。Bグループでの差は認められない。

③ aの③に比べ、Aグループでは4cm、Cでは2cmの増であったが、Bでの差は認められない。な

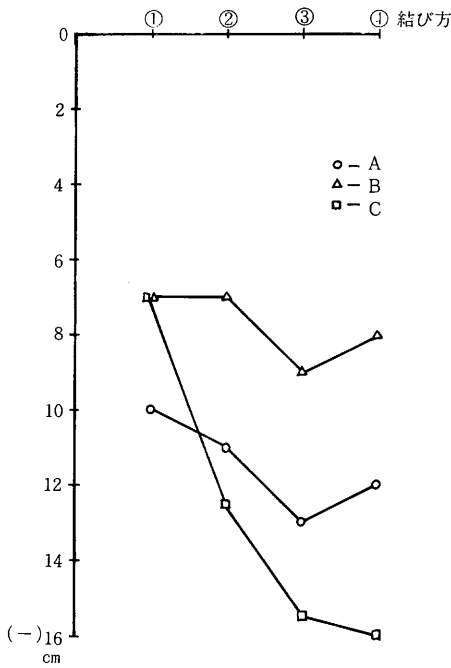


図4 帯枕の当て方 b の場合のお太鼓山の変化

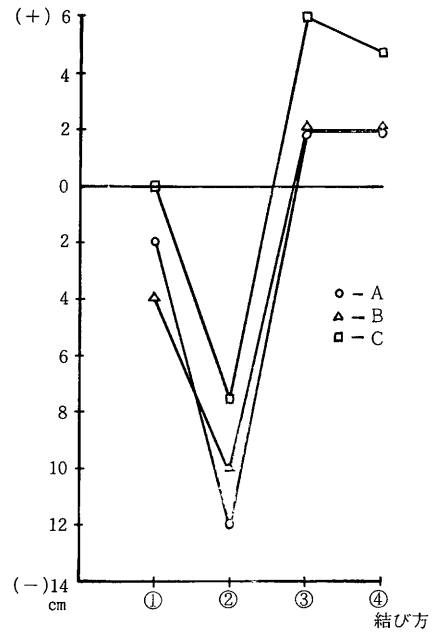


図5 結び方の違いによる手の長さの変化

表5 条件の違いによるC-Dの計測値

(単位cm)

グループ別 被験者	A	B	C
結び方の種類			
1	62.0	64.0	60.0
2	72.0	70.0	67.5
3	58.0	58.0	54.0
4	58.0	58.0	55.5

お②との比較では、A・Bともに2cm増の不足量、Cでは3cmの不足量増であった。

④ aの④との比較では、Bグループでは変化なし、Aでは2cm、Cにおいては3cm増の不足量であった。

以上の結果から帯枕の当て方 a においては、身長差はあまり認められなかったが、b では、いずれの結び方においても身長差が認められた。これは、お太鼓丈を背から脇に廻して帯枕を当てるためかえって小さい方が小廻りがきいて有利になったものと考えられ、大きい人の場合は、手の長さがかえって不利になったものと考えられる。また、着物コンサルタントにおいては、年齢差による身体の柔軟度の違いが現われたものと考えられる。

3. 結び方の違いによる手の長さ

お太鼓結びで重要な役割を果たす手の長さの基本寸法すなわち、C—D間の寸法についての結果は表5の通りである。基本寸法 60 cm を手の長さとし、結び方の違いによって生じる寸法の変化は図5の通りで、0は基本寸法、これを越えて長い場合を(+), 不足した場合を(-)とした。

① 被験者Cにおいては、基本寸法と同寸であったがAグループで2cm、Bグループで4cmの不足量であった。

② この場合は、手と垂れを結んだ後に結び目がゆるまぬように手と垂れの向きを変えるため、方向転換した量が加算され、不足寸法は大となった。Aグループでは12cm、Bでは10cm、Cでは7.5cmの不足である。

③ 基本寸法よりA・Bグループでは2cm、Cでは6cm長く、これは、手と垂れを交差させただけであるため結び目に荷せられる寸法の負担が減少したためと考える。

④ ③と同様、A・Bでは前者と同寸であり、Cでは前者より1.5cm増であったが、いずれも基本寸法より必要寸法は少なくてもよい結果を得た。

以上の結果から、③・④ではいずれも基本寸法以内で処理できるが、①・②ではいずれも不足し、②では最大不足量を示したのはAであった。手の長さにおいては、いずれの場合も着物コンサルタントの方が、その長さはより少なくて済む結果を得たが、これは、始末の仕方の手際のよさが長さに影響を及ぼしたものと考えられる。また身長差は、あまり認められなかった。

結 び

お太鼓柄、名古屋帯の製作に当り、模様を希望通りの位置に出るように製作するためには、寸法設定に当り、B-E間すなわち胴廻りとお太鼓の境い目からお太鼓の山までの寸法の定め方が重要なポイントとなるが、今回の実験により、この寸法は帯幅、また個人の体格によって定められるものではなく、各個人の結び方と帯枕の当て方の影響によることが明らかになった。この間の寸法に余裕がある場合は、帯結びの際、背面での操作が容易であり、この寸法が必要寸法に満たない場合は、お太鼓山の位置が模様部分にずれ込むため、折角の模様が半減することになる。したがってその必要寸法を最少限にとどめるためには、

1) 帯枕の当て方は、両手を後ろに廻して帯の裏側に帯枕を当て背にのせ、お太鼓山を作るaの方法が合理的である。

2) 結び方では、従来から一般的に行なわれている手を左肩に掛け胴廻りを2回廻し、背中心で手が下に垂れが上になる①の方法がすぐれている。

3) 手の長さについては、③・④の方法が良好であるが、①の方法では基本寸法よりやや不足する。しかし、B-E間の寸法とのかかわりにおいて検討するならば、他の方法よりすぐれている。

帯地の選び方については、着尺地と異なり個人の体格に合わせて裁断し、製作するのではなく、多くは帯地として織られているもの、染められているもののなかで裁断する事無く製作されるため、ただ色・柄の好みだけではなく、寸法的に特に前面の模様の位置からお太鼓の模様の位置までの寸法が使用者の体格と結び方に適したものであることを条件の一つとして考慮に入れ、選ぶことがより締めやすい帯をつくることになる。

終わりに本研究にあたり、着装被験者となって下さった学生の皆さんに深く感謝致します。

文 献

- 1) 松井和哥：和裁図鑑，暁教育図書（東京），1974，p. 161
- 2) 主婦の友社編：和裁全書，主婦の友社（東京），1961，p. 275